

比較文化論 : 大項目別報告 : 服飾 2300

著者	吉本 忍
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	83-86
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003674

服 飾 2300

吉 本 忍*

- | | |
|-------|--------|
| 1. 髪型 | 3. 装飾品 |
| 2. 衣服 | |

服飾の大項目のうちには、断髪（オカッパ）、結髪、ターバン、パンダナス製雨頭巾、貫頭衣、肩かけマント、腰みの、腰巻、ふんどし（男性用）、陰茎鞘（ペニス・ケース）、脚はん、長ぐつ（半長ぐつ）、草鞋（わらじ）、石製飾り輪（腕輪・首輪など）、貝製飾り輪（腕輪・首輪など）、金属製飾り輪（腕輪・首輪など）、子安貝製装身具という18項目にわたる小項目があげられている。以下では、これらの小項目を、髪型、衣服、装飾品に大別しコメントする。

1. 髪 型

髪型としては、断髪（2301）と結髪（2302）の2項目があり、断髪に38件、結髪に98件の分布例が示されている。これらの分布例の特徴としては、双方の件数にかなりの開きがあるものの、ともに東南アジア・オセアニアの広範な地域にわたって、とりたてて地域的な偏差もなく分布していることがあげられる。また、断髪に38件のうちでは、29件に結髪との重複が認められている。このことと、髪型が伝統的に、性別、未既婚、身分、帰属などを示す一種のサインとして機能してきたことをかんがえあわせるならば、断髪と結髪に重複する29件の民族のもとには、個々に髪型の違いに関する何らかの制度的な区別のあることが想定される。したがって、特定の制度的な分布の連続性の有無については、かなりの興味を持たれるところであるが、残念ながら今回のクラスター資料からは、この点についてうかがうことは不可能である。

* 国立民族学博物館第2研究部

2. 衣 服

衣服としては、ターバン (2303)、パンダナス製雨頭巾 (2304)、貫頭衣 (2305)、肩かけマント (2306)、腰みの (2307)、腰巻 (2308)、ふんどし (2309)、陰茎鞘 (2310)、脚はん (2311)、長ぐつ (2312)、草鞋 (2313) の11項目があがっている。ここではこれらの項目を、さらに、被物、上衣、下衣、履物に区分してコメントする。

1) 被 物

被物としては、ターバン (2303) とパンダナス製雨頭巾 (2304) の2項目があり、ターバンに78件、パンダナス製雨頭巾に26件の分布例が示されている。このうち、パンダナス製雨頭巾の件数がターバンにくらべてかなり少ないことは、素材や用途が限定されているためとみられるが、双方の分布の特徴としては、髪型の場合と同様に、ともに東南アジア・オセアニアの広範な地域にわたり、とりたてて地域的な偏差もなく分布していることがあげられる。なお、ターバンについては、78件の分布件数のうちで54件が腰巻 (2308)、50件が結髪 (2302)、32件がふんどし (2309) と重複しており、このことから、ターバンとこれらの文化要素の間にはかなりの相関関係があることが推察される。

2) 上 衣

上衣としては、貫頭衣 (2305) と肩かけマント (2306) の2項目があり、貫頭衣に19件、肩かけマントに44件の分布例が示されている。これらはともに分布件数がさほど多くはないものの、その分布は東南アジア・オセアニアの広範な地域におよんでおり、地域的にとりたてて偏差のみられないことが特徴となっている。ただし、貫頭衣と肩かけマントの分布例で重複しているのはわずか5件であり、この数字からは、双方の文化要素のあいだには、あまり関係はないとみられる。なお、肩かけマントの分布例では腰巻とのあいだに32件の重複があり、そのうちには Javanese, Sundanese, Balinese のもとで認められるような、肩かけと腰巻を組み合わせ使用する例が多いのではないかと思われる。

3) 下 衣

下衣としては、腰みの (2307)、腰巻 (2308)、ふんどし (2309)、陰茎鞘 (2310) の4項目があり、腰みに59件、腰巻に133件、ふんどしに103件、陰茎鞘に13件の分布例が示されている。これらのうち腰みと陰茎鞘は、ともに分布例の大半がオセアニアに集中しているが、東南アジアの大陸部の Dafia に腰みの、Nya Hon に陰茎鞘

の分布例があることは、東南アジア・オセアニアで過去に腰みのと陰茎鞘が普遍的に分布していた可能性を示唆するものとして注目される。一方、腰巻とふんどしは、ともに東南アジア・オセアニアの広範な地域にわたって分布している。また、これらのあいだには76件もの重複が認められる。したがって、これらのことがらと先に述べた肩かけマントと腰巻の関係を考慮するならば、腰巻とふんどしと肩かけマントの組み合わせは、東南アジア・オセアニアにおける衣服としてきわめて普遍的な文化要素であるといえ、この地域の衣服が、歴史的に腰みのや陰茎鞘から腰巻とふんどしと肩かけマントの組み合わせへと展開した可能性が考えられなくもない。

4) 履物

履物としては、長ぐつ (2312)、草鞋 (2313) があるが、脚はん (2311) についても足を保護するという点では長ぐつや草鞋と共通することから、この項でコメントする。以上の3項目では、脚はんには26件、長ぐつに5件、草鞋に15件の分布例が示されている。このうち脚はんと長ぐつは、服飾の大項目の中で東南アジアのみに分布例が認められており、脚はんの分布例については、とくに大陸部と島嶼北部の山地民のもとに集中していることから、脚はんはこれらの地域の山地民に特徴的な文化要素として捉えることができるであろう。しかしながら、長ぐつについては、台湾から東部インドネシアにかけてのみ分布例が認められるものの、分布件数がきわめて少ないことから、どのように解釈すべきか躊躇せざるをえない。一方、草鞋は、おもに東南アジアの大陸部とオセアニアに分布例が集中しており、東南アジア島嶼部では、わずかに Ivatan の例が1件認められるにすぎない。したがって、このような分布例からは、草鞋は東南アジア大陸部の山地民とオセアニアの海洋民のもとで使用されてきたという特徴がうかがわれるが、地域的な隔たりや、生活環境、生活様式の異なる双方のあいだに、格別の関連があると考えことはきわめてむづかしい。

3. 装飾品

装飾品としては、石製飾り輪 (2314)、貝製飾り輪 (2315)、金属製飾り輪 (2316)、子安貝製装身具 (2317)、猪牙製装身具 (2318) の5項目があがっている。以下では、これらを飾り輪、子安貝と猪牙の装身具にわけてコメントする。

1) 飾り輪

飾り輪には素材の違いごとに、石製飾り輪が24件、貝製飾り輪が102件、金属製飾り輪が101件の分布例が示されている。これらの分布例は、いずれも東南アジアとオ

セアニアの両地域にわたっているが、石製飾り輪や貝製飾り輪の分布と金属製飾り輪の分布のあいだにはかなりの違いが認められる。まず、石製飾り輪と貝製飾り輪は分布件数に大きな隔たりがあるものの、ともに東南アジアとオセアニアの広範な地域にわたって、とりたてて地域的な偏差もなく分布している。しかしながら、これらの飾り輪には重複件数が9件しかなく、このことから分布件数の違いと同様に、東南アジア・オセアニア地域では、飾り輪の素材として、一般に石よりも貝のほうが高い価値をもって受けいられていたことがうかがわれる。一方、金属製飾り輪は貝製飾り輪とほぼ同数の分布件数であるが、その分布は東南アジアに集中しており、オセアニアでは Waropen と Austral で認められているにすぎない。また、このような金属製飾り輪の東限は、いわゆるドンソン・ドラム（銅鼓）の東限ともほぼ一致しており、かつての金属器文化圏と重複している点が注目される。なお、金属製飾り輪と貝製飾り輪との分布のあいだには37件の重複が認められる。この数字は、双方の分布の地域的な違いを考えるならばかなり高い重複率といえ、このことも、先に言及した飾り輪の素材としての貝の価値の高さを示唆するものといえるであろう。

2) 子安貝と猪牙の装身具

子安貝製装身具には24件、猪牙製装身具には35件の分布例が示されている。これらの分布例については、ともに東南アジアとオセアニアの両地域にわたって認められ、同時に高文化の民族のもとでは分布例がないという共通の特徴がある。ただし、クラースター資料では欠落しているが、子安貝製装身具は、Orang-Abung のようにイスラム教徒のもとにも分布例があるものの、猪牙製装身具にはイスラム教徒のもとでは分布例がないという違いがあり、この点については、ブタが宗教上の慣例によって忌避されてきたことが起因しているものと考えられる。なお、子安貝製装身具と猪牙製装身具の分布例のあいだには11件の重複が認められるが、この程度の重複件数では双方の装身具の関連性の有無について言及することはできないであろう。